

巻頭言

小島 宏（日本人口学会会長 早稲田大学）

本報告書がここまで立派なものになったのは、研究企画委員会委員長の川口洋先生と委員の皆様（鬼頭宏，黒須里美，村越一哲，鈴木允の各先生）のご尽力が大きい。2020年6月に研究企画委員長への就任を川口先生にお願いした際には、5名程度の方々による歴史人口学の分野別展望論文集を作成していただくことを想定していた。当然ながら、前年の12月に亡くなられた速水融先生の追悼という意味も大きかった。速水先生が1990年代後半に国際日本文化研究センター（日文研）で研究代表者として率いられた「ユーラシアプロジェクト（EAP）」で、川口先生をはじめとして、本報告書の執筆者となってくださった先生方の多くと一緒に研究させていただいたこともあった。特に、川口先生は速水門下でなく、歴史地理学・人文社会情報学出身の歴史人口学者としてEAPとは別の歴史人口学データベースを開発されており、当時から傑出した存在であったことから、研究企画委員長としての任期中に25章から成る本報告書を取りまとめるという偉業を達成されたのではないと思われる。

本報告書の原型の構想を持つに至ったことについて心の中では、速水先生の追悼と同時に、歴史人口学に導いてくださり、速水先生のお亡くなりになる6年前の12月に急逝された、浜野潔先生の追悼という意味もあった。ご存命ならば慶應での直系の末弟として本報告書の取りまとめに貢献されていたのではないかとも思われる。日本人口学会としても2009年大会の実質的な運営委員長であった浜野先生に感謝すべきであると思われる。同大会で早めにセッションを抜け出して廊下でコーヒーを飲んでいたところ、巡回中の浜野先生に呼び止められ、家族愛溢れる話を伺ったことが、最後の出会いの機会となった。巻頭言として相応しいかどうか分からないが、両先生を含む多くの先生方のお導きにも関わらず、結局、歴史人口学者にはなれなかった者として、以下では追悼という意味も込めてお二人の先生方のお導きで本報告書の企画委員と執筆者の多くの方々を含む歴史人口学界と繋がりを持てた経緯を書かせていただき、その発展の非公式な側面について述べたい。また、最後に本報告書の構成について若干の感想を述べさせていただき、巻頭言に代えさせていただきますこととする。

速水先生とは1981年12月にマニラで開催された国際人口学会大会のレセプションで初めてお目にかかった。大学院生時代に『社会経済史学』の歴史人口学特集号でご著作を拝読していたものの、拝顔したことがなかったので感激したことを覚えているが、その出会いから歴史人口学界にすぐに繋がりを持つことはなかった。その前後に、社会学系の研究会で知り合った慶應の大学院生の紹介で当時、修士課程の大学院生だった浜野先生の知

遇を得て、斎藤修先生がご自宅で開かれていた英国歴史人口学の勉強会に参加させていただくことになった。その後、斎藤先生編の『家族と人口の歴史社会学』で一章の翻訳を担当させていただき、歴史人口学界の末席を汚させていただくことになった。その間に勉強会に参加されていた鬼頭宏先生が中心となって組織された歴史人口学研究会にも参加させていただき、速水先生とも再会し、1985年の歴史人口学の国際セミナーにも参加させていただいた。鬼頭先生の『人口から読む日本の歴史』のあとがきによれば、速水先生のご指示により国際セミナーの準備のために歴史人口学に関心がある研究者百名ほどに声をかけられたとのことであるが、それが歴史人口学者や家族史研究者を「養成」された EAP、そして本報告書に繋がっているように思われる。また、この国際セミナーの資金繰りのため、ご夫婦間で「成田（杉並区）闘争」（交渉）をされたとおっしゃっていたのも思い出す。これらは学術的企業家としての速水先生の一面を示すようにも思われる。

歴史人口学研究会では、速水門下とは限らないが、本報告書の執筆者の方々の多くの知遇を得たこともあり、やがて EAP に参加させていただくことになり、京都の大学に職を得られた浜野先生には速水先生の研究面の補佐役としてお世話になった。しかし、オスマントルコの人口の研究チームに参加させていただいたこともあり、ムスリム人口の研究を中心とする宗教人口学の道に入ることになり、歴史人口学とは直接関係ない研究をするようになってしまった。EAP 終了後も速水先生編『歴史人口学と家族史』に訳者として参加させていただいたし、後継プロジェクトのセミナー等にも参加させていただいてきた。速水先生の日文研着任当初の頃から実務面で補佐され、速水先生が麗澤大学に移られてからご自身も戻られて EAP の後継プロジェクトを補佐され、やがて継承された黒須里美先生が新宿キャンパスで開催されてきた歴史人口学セミナーにも参加させていただいてきた。また、斎藤先生の勉強会に参加されており、EAP 開始前年に日文研に移られて速水先生が「落合効果」と名付けられたような貢献をされた落合恵美子先生にもお世話になって『歴史人口学と家族史』の共編者を務めさせていただいた。黒須先生・落合先生のいずれも主として現代の世帯や家族を研究されていたと思われるが、歴史人口学・家族史の分野でも大成されたのは日文研での EAP を通じた「養成」によるところが大きいのと思われる。

日本人口学会やその関西地域部会で浜野先生とともに歴史人口学を盛り立ててこられた川口先生が研究企画委員長として本報告書の企画・調整と執筆を担って完成させていただいたことについては EAP での繋がりが大きいのではないかとと思われる。また、お名前を挙げさせていただいた鬼頭先生、斎藤先生、落合先生が歴史人口学の発展に関わる第 I 部に寄稿され、黒須先生と川口先生が方法論に関する第 II 部に寄稿されるのも EAP があってのことだと思われる。第 III 部に寄稿してくださった先生方の大部分は歴史人口学研究会、EAP、歴史人口学セミナー、本学会関西地域部会で知遇を得た先生方であり、速水先生のご遺徳が偲ばれる。日本人口学会を代表して、研究企画委員会の皆様と執筆者の皆様の本報告書に対するご貢献について謝意を表する次第である。

最後になったが、本報告書の構成について若干の感想を述べさせていただくことにする。恐らく日本人口学会会員に適任者がおられなかったためかと思われるが、第 III 部の副題に「民衆像」が入り、速水先生の歴史人口学との出会いに貢献した常民文化研究所での学術的経験・訓練の機会を与えたと思われる、民俗学（者）の観点から明示的に書かれた章が含まれていないように見受けられる。執筆者の中には民俗学の教育・訓練を受けられた

方々もおられるようなので残念である。また、同研究所で速水先生が宗門人別改帳をご覧になり、その後も「西南日本」（社会学等で一般的な地域区分とはずれがある）の代表として大きな興味を示され続けた長崎県野母村に関する章がないのも残念である。執筆者の中には野母に関する著作がある方もおられるが、事例として挙げられているだけである。

他方、速水先生が歴史人口学との出会いに貢献したとおっしゃったフランス（仏語圏）歴史人口学に関する章も第 III 部の最後でない。これは元々フランス家族史の研究をされていた EAP 参加者が速水先生の「養成」によって日本の家族史の研究をされることになったためかとも思われる。速水先生が 1963～64 年に Gent (Gand) で出会われたという L. Henry の歴史人口学マニュアル (Fleury & Henry 1956 の初版本か) やその付録の FRF や各種ワークシートが具体的にどのように BDS の発案に繋がったかについての検証も含むような仏語圏歴史人口学に関する章があれば良かったのではないかと思われる。また、E. Todd の家族形態に基づく欧州の地域区分の書物 (1990 年) を EAP 実施中から速水先生は評価されており、それが独自の国内地域区分に繋がった可能性があるため、そのような観点を含む仏語圏歴史人口学の評価も必要であったように思われる。

仏語圏では 1924 年に統計学者の C. Gini が生殖のために十分な夫婦間性交渉（カトリックの教えに沿う）を暗黙の前提とする「fécondabilité（受胎確率・受胎能力）」を定義したし、1961 年に数理的人口学者の L. Henry が英語論文で「自然出生力」を定義する前に再生産歴（生殖歴）を明らかにするような家族復元法を考案して歴史人口学のマニュアルとモノグラフを出し、1981 年には数理人口学者の H. Le Bras が E. Todd と共著でフランスの地域区分の書物を出しており、数理人口学者が歴史人口学者と共同研究をして歴史人口学を盛り立ててきた経緯がある。その背景には日本の宗門人別改帳の発展の背景と同様、カトリック（日本の場合は速水先生の論考のタイトルにある通り、ザビエル等の宣教師が来たこと）と人口（増強）主義（populationisme）があったのではないかと思われる。その意味では歴史人口学研究会・EAP に参加されたものの、歴史人口学からはやや距離を置きながら江戸時代の性と生殖を研究してこられた沢山美果子先生が第 III 部の最初の第 7 章を担当されているのは非常に結構なことである。墮胎・間引きとの比較で、宗門人別改帳に記載されない乳児を含む捨て子とその対策について論じ、江戸時代における町・村や藩レベルでの人口増強主義を示されている。

無いものねだりをしてしまったが、日本の歴史人口学の基本データ（乳児については欠損値）が人口静態統計タイプの宗門人別改帳であり、人口動態統計タイプの教区簿冊を基本データとする欧州の歴史人口学とは異なることから、人口変動要因（出生・死亡・移動）に関する章が少なく、その近接要因や人口の基本的属性（規模・構造・分布）に関する章や家族人口学的研究の章が多いのはやむを得ないことなのであろう。いずれにしても歴史人口学的データの制約とそれにも関連する人口学会会員の歴史人口学的研究テーマの制約や時間的・金銭的制約の中でこのような立派な報告書が完成したことについて研究企画委員会と執筆者の皆様へ感謝したい。また、日本人口学会のサイト上で公開されることにより、日本人口学会会員とは限らず、多くの方々が本報告書にアクセスできるようにすることについてはヒトの生殖過程について詳しい中澤港委員長をはじめとする広報委員会の関係者にも謝意を表する次第である。